

ルポ・精神病棟

大熊一夫

精神病棟

大熊一夫

朝日新聞社



大熊一夫 (おおくま かずお)

1937年、東京都墨田区東两国に生れる。東京
大学教養学科科学史・科学哲学分科卒業後、
1963年、朝日新聞社に入社、長野支局、水戸
支局、内政部、首都部を経て現在は週刊朝日
記者。

ルポ・精神病棟

昭和48年2月20日／第1刷発行

昭和51年2月20日／第14刷発行

著者／大熊一夫

発行者／朝日新聞社 角田秀雄

印刷所／図書印刷株式会社

発行所／東京・名古屋 朝日新聞社
大阪・北九州

定価／640円

目次

I ここを病院だと思つてはいけない

- 1 招かれざる客
- 2 便所の穴とともに
- 3 十五歳の捨て子
- 4 檻
- 5 焼けたピンセット
- 6 牢名主
- 7 ノックは不要
- 8 ふり出しに戻る
- 9 ご回診
- 10 都議選異聞
- 11 私刑
- 12 搾取
- 13 置去り

II 賛否のるつぽ

- 1 眼の前が真暗
- 2 一部の悪徳病院を誇張した罪
- 3 まじめな人をがっかりさせた罪

84 82 73 71 67 61 56 52 47 44 40 33 29 25 20 16 13 11

4 センセーショナルの罪

5 政治が悪いからだ、といわない罪

6 神のごとき……

Ⅲ 蒸発者が殺人者になるまで

1 殺人者からの手紙

2 強制収容所における人間行動

3 汚辱の歴史

4 拘置所からの告発

Ⅳ 株式会社「精神病院」

1 わてのいう通りしはったら

2 死因のナゾを追って

3 くすり漬けの恐怖

4 もうけたのは誰か

5 ある会計報告

Ⅴ 病院長の告白〈座談会〉

Ⅵ 「ぬけさくタヌキ」

1 精神病ってなんだ

2	クビにされた側の論理
3	クビにした側の論理
4	「ぬけさくタヌキ」は誰か
VII 処分を請負う人たち	
1	ギャング部屋の反乱
2	電パチぼけ
3	西瓜割り
4	一見、科学的な……
5	未婚の母
6	抹殺への道
	あとがき

ルポ・精神病棟

「我邦ノ精神病者ハ実ニ此病ヲ受ケタルノ不幸ノ外ニ、此邦ニ
生レタルノ不幸ヲ重ヌルモノト云フベシ」——日本の精神医学
の父、故奥秀三東大教授の大正七年の実態調査報告から。

昼めしで、アジの干ものの頭を残した。私がもう頭を食べないとわかつた瞬間、患者たちの間で奪い合いが始つた。東京のある精神病院。私はアル中患者として二月初旬に入院した。三週間は居るつもりだつた。が、十二日目に精根つき果てた。

退院の日、背中に突刺さつた患者たちのまなざしを忘れることができない。彼らは、留置場、刑務所以下の生活をしいられ、いつ出られるとも知れない身だつた。最新刊（四十五年一月）の日本精神神経学会誌によれば、「患者を虐待する『狂つた精神病院』が多い」という。私の入院先も、その例外ではなかつた。

友人と妻に抱えられ、その朝、私は精神病院の門をくぐつた。かなり酔つていた。零細な印刷屋の長男、飲むとからみ、妻をなぐる、仕事もサボる、幻聴もあるらしい……こんな経歴のニセアル中だつた。専門医が診断すれば、いっぺんにバレるのではないか。そんな不安もあつた。

院長は、私の目玉の中をのぞいた。「ほー、こりゃ飲んでる。入院だ、入院だ」

一分たらずの診断で、ニセ患者は、入院を必要とする重症患者に変わった。

保護室に入れられた。広さは約三畳、べっこう色に変色したたたみに、フケだらけのせんべいぶとん、コンクリート・ブロックの壁、北側の壁に、鉄格子入りの天窓、部屋のすみに便所のアナが見える。絶えず、便所の土管から臭気が吹上げてくる。駅の公衆便所に寝るに等しい。暖房はない。水洗のしぶきが床をぬらす。水が凍った朝もあった。

保護室と隣合って、不潔部屋というのがあった。廊下とは鉄のサクで仕切られている。動物園のオリに似て、もっと薄暗い。「不潔部屋」の表札は、病院側の手で掲げられていた。

そこに失禁の老人など十人ほどが寝ていた。部屋のすみには、例の便所のアナ。サクの外に手を出してセンを押せば、底を水が流れる。

世話する人もなく、外へ出られない老人たちは、この水洗の水で顔を洗い、それを飲む。廊下には、汚物にまみれた下着やおむつが山と積まれ、異臭を放っている。

入院六日目、保護室から大部屋に移された。寝室、食堂、作業場を兼ねた四十五畳。患者二十五人。独房から出た身には、広く感じたが、牢獄の雰囲気には変りはない。火の気なく、窓にはさびた鉄格子、玄関に向う通路に、ぶ厚い鉄製の扉がある。

大部屋生活の初日、妻から弁当箱で、たき込みごはんの差入れが届いた。連日の冷えと運動不足で食欲がない。「だれか食べませんか」といったとたん、三人ばかりがワツと寄ってきた。二十秒ほどで平らげた。「あーあ、シャバめしはうめえなあ」「シャバ」という言葉を一日に何回聞いたことか。

日本医師会の武見太郎会長は「精神病院の経営者は、牧畜業者と同じである」と、かつて述べた。

病む心と医師がふれ合う所が病院であって、ここは「病院」の名をかたる「人間の捨て場所」であった。医師との接触はほとんどなく、入院したが最後、病状も退院時期もわからない、いわば不定期刑なのだ。もし、……もし逃げてでも失敗すれば恐るべきリンチが待っている。

〈注〉 これは、昭和四十五年三月五日の朝日新聞夕刊社会面にのった「ルポ・精神病棟」である。ルポはこれを第一回として、計七回連載された。

*

入院者の痛みは、入院者になってみなければ、わからない。だから、私は患者として、入院した。ルポが新聞に出て、三年ちかかった。精神医療に全くのシロウトだった私も、その後、取材を通して、貴重な体験を積んだ。その蓄積を踏まえて、改めて「ルポ・精神病棟」を書こうと思い立った。

I ここを病院だと思ってはいけない



廊下と部屋が格子で仕切られている「不潔部屋」。
この檻の中では、ひたすら寝るしかない。

1 招かれざる客

45年2月5日 目が覚めた。物音ひとつしない。真夜中のようだ。寒い。パンツの下から、小さなメモ用紙と手帳用の豆えんぴつを取出す。シャツの下に隠しておいたら、着替えのときバレるところであった。きょう一日のことを思い出しながら書く。

朝八時に目を覚ました。まくら元に用意しておいた日本酒の四合びんを飲みほした。緊張のせいか、思うように酔えない。酒が強いのもこういうときは困る。ウイスキーをグイとラツパ飲みした。

九時。予約のタクシーが来る。妻と乗込む。

「酒ヤケもしていないのに、はたして入れてくれるだろうか」「もつと周到に、アル中のしぐさを勉強すべきではなかったか」……あれこれ考えると、とても笑顔なんてできない。車にゆられたら急に酔いが回ってきた。吐いた。運転手の迷惑そうな目。「酒を飲んで吐くような弱々しいアル中なんて。あやしまれないだろうか」……

途中で社会部の佐藤国雄記者を拾う。

佐藤氏と妻に両わきを抱えられて病院の玄関をはいった。看護婦が「男の人来てくださーい」と叫ぶ。すぐ診察室へ通される。

医師が懐中電灯で私の目の玉を照らし、中をのぞいた。

「こりゃー飲んでる。入院だ、入院だ」

《あとで、この医師は院長であることを知った。》

一分たらずの診察の結果、白衣を着た屈強な男に抱えられて奥へ連れていかれた。妻が私のあとを追おうとしたら、金切り声が飛んだ。

「ここから先は、家族の方はご遠慮くださいッ」

重そうな鉄の扉をあけると、そこは薄暗い病棟の廊下だった。たむろしていた十数人の患者の、ドロとした力のない視線が、私に集中した。もうろうとした頭の中で「こわい」と感じた。

《大変恥ずかしいことだが、当時、私は精神障害者はこわい、という偏見を捨てていなかった。しかし、この入院生活を経たいま、その認識がいかに間違っていたか、反省している。》

廊下のゆき止りにある独房（保護室と呼ばれる）に入れられる。車中で吐いて衣服をよごしたため、パンツ一枚にされる。ネルの、ヒザ小僧が出るようなつんつるてんの寝間着を着せてもらう。酒で頭がよく回転しない。まずは寢床に横になった。

ガーン。さびた鉄の扉が荒々しく締められた。錠がかけられた。

覚悟の上とはいえ、その瞬間から私がわめこうが、どうしようが、その声は絶対に外に届かない。